コーちゃん・オーちゃんの「見つけた！豊岡元気人」

諦めないでつかんだ夢 活躍の舞台はプロ野球へ！

城崎温泉の旅館で働きながら目指したプロ野球選手。ドラフト会議で指名を受けて、見事プロ野球選手になった元気な男性を紹介します。

河野大樹さん（23歳）城崎町湯島

安定感のある守備が売り

旅館では送迎、布団敷きなどを担当

この一年でバッティングに自信

10月23日に開催されたプロ野球のドラフト会議（新人選手選択会議）。福岡ソフトバンクホークスから育成枠で指名を受けたのが、本市を本拠地に活動する社会人野球チーム「NOMOベースボールクラブ」の河野大樹さんです。

同クラブが本拠地を大阪から豊岡に移してから初のプロ野球選手の誕生です。

将来の夢は「プロ野球選手」

大阪市出身の河野さん。野球をしていた3歳年上の兄の影響で、小学1年生から少年野球チームに所属し、毎日練習をしました。中学生になると、地域のシニアリーグ（中学生の硬式野球）に所属。「大会で成長を実感できるので、練習が楽しくて仕方なかった」と当時のことを笑顔で話します。

高校は野球の名門、上宮太子高等学校に入学。野球漬けの毎日が始まりました。副キャプテンとして甲子園出場を目指した3年生最後の夏。チームは地区予選ベスト8まで勝ち進みました。最後のバッターは河野さんでした。2点差を追う9回1アウト満塁―1打同点の場面で併殺。「人生最悪の場面」と涙しました。しかし、やりきったと悔いは残りませんでした。高校卒業後は三重中京大学に進学し、プロを目指しました。

一度は諦めかけた「夢」

大学では2年上の先輩がショートのレギュラー。「実力では自信があった」のに、試合の出場機会に恵まれず、ふてくされて練習をさぼることもありました。3年生からはレギュラーになりましたが、プロへの憧れは薄れて、4年生の秋までは普通に就職しようと思っていました。

プロへの憧れを再び抱くようになったのは、同大学の同級生、則本昂大投手の東北楽天ゴールデンイーグルスからの指名。「自分もプロでやれるのでは」と考えました。プロを目指したいと監督に相談。同クラブを勧められ、トライアウト（入団テスト）を受け、入団が決まりました。

豊岡で目指したプロ野球選手

初めて豊岡に来たのが平成25年2月。豊岡は大雪でした。「こんな雪の中で野球ができるのか」と不安でした。「2年以内にプロになる」と親に約束。城崎温泉の旅館で働きながら、プロを目指す生活が始まりました。

プロを目指す最後の年と決めていた今年。「全体練習も自主練習も妥協しないで取り組んだ。これでダメなら、プロは諦められる」とやり切りました。ドラフト指名の吉報は母親からの電話でした。「これまでの人生で一番うれしかった」と喜びます。

本市で活動する同クラブを「プロになる一番いい環境。全天候型の但馬ドームがあり、全体練習と仕事の合間には、ウエイトトレーニングや素振りなどの自主トレーニングができる」と良さを実感しています。

豊岡の人に感謝

「クラブを支えていただいている市民の皆さんや後援会の応援、勤務時間の調整などでの旅館の全面的な協力に感謝したい」と話す河野さん。

夢だったプロのスタートラインに立てました。「自信のあるショートの守備をアピールし、一日でも早く一軍に這い上がりたい。プレーしている姿を豊岡の人に見せるのが恩返し」と意気込みます。

まちの話題

トヨオカ カバン アルチザン スクール作品講評会
世界に一つだけ 私のカバン

11月25日、4月に開校したかばんの職人育成専門校「アルチザンスクール」の生徒作品講評会が開催されました。

全て皮革製鞄で、オリジナル作品と「課題として指定された鞄」を復元した作品の2種。生徒は、かばん関係事業者に作品のテーマやポイントなどを説明し、自作の前で感想・意見を聞きました。

全体講評では「真剣に取り組んでいる姿勢が良い。到達点を高い所に置き、細かい所も勉強してほしい」などと評されました。

個性にさまざまな技能をプラス。かばん業界の未来を担う人材が育っています。

▲かばん関係事業者が、感想を書いた付箋紙をかばんに貼る形で講評

▲30～50㎝に生長した苗木を2、3人で植樹

竹野3小で「どんぐりプロジェクト」
40人で〝未来を植える〟

11月20日、竹野の3小学校（竹野・中竹野・竹野南）の6年生40人が、竹野町森本・坊岡の丘陵地約500平方メートルに、ドングリの苗木約70本を植えました。

竹野小の久田伸幸君は「植樹は面白かった。苗を鉢から取り出すのが難しかった」と話し、3年生の時から総合学習などで行ってきた「育てる活動」を振り返りました。

ドングリの実から育て、ドングリの森にしようーと、1年目に「ドングリ拾い」、2・3年目に苗を育て、4年目に植樹するのが「どんぐりプロジェクト」。息の長いこの緑化活動は、全国各地で行われています。

笑顔の輪

絶妙な掛合いが笑いを誘う

法花寺万歳保存会（豊岡）

正月に家々の座敷や門前で祝いを述べる、祝福芸「万歳」。法花寺区に伝わる万歳を伝承しているのが、昭和47年に結成された「法花寺万歳保存会」です。現在、会員は9人。毎月第3日曜日に法花寺公民館で練習をしています。

同万歳は、江戸時代、京都に奉公していた村人が習い覚え、帰郷後に農閑期に門付けをしたのが始まりとされています。演者は烏帽子に素襖を着て扇子を持った「太夫」と、大黒頭巾に裁着袴に鼓を持つ「才若」の2人。そこに三味線が加わります。太夫と才若が、掛合いで寿詞を唱えた後、くだけた余興を演じます。才若がボケで、太夫がツッコミで、お客さんの笑いを誘います。

「相方との掛合いのタイミングが何より大切」と話すのが同会会長で太夫を演じる藤原　求さん。相方の踊りやセリフも覚え、呼吸を合わせながら演じますが、その日の体調などで微妙に演技が変わります。「めでたい芸能なので、笑顔で演じて、お客さんに招福があるように」と心掛けています。

結婚式で数回演じたホテルから、結婚式のオプションにしてはどうかと提案されたこともありました。

県内で唯一万歳を継承している法花寺万歳。平成25年に、地域文化功労者文部科学大臣表彰を受賞しました。「お客さんとの一期一会が楽しみ。掛合いが決まったときには大きな拍手をもらえ、爽快感がある」と笑顔で話します。来年1月3日（土）のコウノトリ文化館での上演に向け、練習にも熱が入ります。

※「笑顔の輪」の拡充版を市ホームページに掲載しています。